不登校児童への生活体験的支援の効果について（実践報告）

Effect of following experiencing everyday life for school refusal case

次世代教育学部こども発達学科
勝田麻津子
KATSUDA, Matsuko
Department of Child Development
Faculty of Education for Future Generations

キーワード：不登校，生活体験的支援，ひきこもり傾向

Ⅰ　はじめに

不登校の子どもたちへのサポート場所として，公的機関である適応指導教室や教育センターをはじめ，民間のフリースクール等においてもさまざまな取り組みがなされている。

その一つとして，筆者は不登校生支援を目的とした公益財団法人において，X年より５年間にわたり，小中学生の「居場所」の開設・運営に関わった。その「居場所」に通室する子どもたちの特徴として　①人間関係の広がりにつまずきがある　②日常生活体験が乏しい　③学習不振への不安と焦り，もしくは無気力　④家庭を含め，子どもを取り巻くサポートネットワークが少ない，という様子が重複してみられた。

そこでの支援方法として，場所的環境として「個別面談のスペース」と「グループ活動の居場所」の２つの部屋作り，人的環境としてサポートスタッフにボランティア大学生をお願いした。

心身ともに発達過程における子どもたちにとっては，構造的な個別心理療法のみでなく，同年代の７～８名のスモールグループによる「居場所」づくり，そこでの日常体験や対人関係の充実につながる個別の発達課題に添ったプログラムの検討，さらには家庭を含め，子どもを取り巻く他の教育機関とのネットワークによる支援をとおして，不登校児童生徒への再登校支援や社会復帰をすすめてきた。

ここでは，不登校を経て再登校につながり，現在は社会人として生活しているA子の事例を振り返り，不登校児童・生徒へのサポートの在り方を検討していく。

Ⅱ　事　例

事例は本質に関わらない程度に改変しプライバシー保護に配慮して記述する。「　」はA子・母親・担任の言葉，＜　＞は筆者の言葉とする。主訴と生育歴は初回面接時の母親からの聞き取りによる。

１．事例の概要

【家族構成】

事例Ａ子は初回面接時，小４年生で10歳の女子である。家族構成は，会社勤務の43歳の父と，パート勤務の40歳の母，スポーツ万能で活発な中学３年生の兄，そしてA子の４人家族である。

【主　訴】

対人緊張が強く小学４年生から教室に入れない。人前で不安緊張が高く，声を出しにくい。

【生育歴】

２歳までは母親の実家の近くに住み，A子が３歳の時に父親の両親と同居する。A子は，小学生になって祖父母が亡くなるまで，「恥ずかしい」「自分の声が低いから嫌い」との理由で，自分から祖父母に話しかけることはなかった。

父親に対してもA子は小学校入学までは自分から父親に話しかけることはなく，小学校入学に合わせて父親とは自然に話せるようになった。学校ではただ一人の仲が良い友達の他は話しをすることができずに，集団の輪の中に入っていけなかった。「A子さんは，学校ではいつも体をこわばらせて緊張感が強い様子です」と毎年担任から聞いていた。

４年生で男性担任に変わり，仲が良かった友達ともクラスが離れた。A子は，この頃から授業中に腹痛を頻繁に起こし，学校のトイレから出られなくなるとい

う状況が続き，次第に登校渋りがはじまる。小４の２学期頃には全く登校できなくなる。

【来室経緯】

母親は「このままで，Ａ子はどうなっていくのか」との不安から小児科を受診。医師からは「どこも問題は無い」と言われてカウンセリングを勧められたが，A子はカウンセリングの予約当日に体調不調を訴えてキャンセル。担任からは適応指導教室を紹介されて親子で見学に行くが，怠学傾向の活発な男子児童生徒が多く，A子は通室を渋る。A子は「勉強が心配だから塾は通う」と言うが，塾への欠席も続く。母親がいろいろな不登校児童をサポートする場所を探した末に，公益財団主催の不登校生支援の「居場所」を訪ねる。

２．支援過程

１）初回面接（X年２月　A子４年生）

母子合同面接を行う。きちんとしたスーツ姿の母親の隣に，髪の毛を無造作に束ねて，ミニスカート姿のA子が座る。母親はＡ子を登校へと焦らすつもりはないが，自分が仕事に出ることが多いので「A子が毎日一人で家に居ると心配。A子が家以外で毎日でも行ける『居場所』がほしい。そこで勉強も教えてほしい。学校に行かないと勉強が遅れていくことも不安」等々の気持ちを語る。A子は表情を変えず母親の横で姿勢を崩さず母親の話を聞いている。筆者が＜A子さんの気持ちは？＞と尋ねるが，首をかしげるしぐさのみで返事はない。

母親を別室に案内して，A子と二人の面談になった途端に身体を前後に揺すって足をバタバタさせる。＜ここでA子さんの好きなことでも探してみようか＞との問いに，「うん」と返事をする。

２）第１期：X年４月～９月（A子５年生）

A子の対人関係を支援するサポート

当初の通室はA子を含めて３名のみ。A子にとっては大学生ボランティアスタッフが自分のペースに合わせてサポートしてくれる。A子は絵を描くことが好きで，筆者は会話が上手くできないA子と描画をとおして遊びながら関わる，居心地のよい「居場所」となった。

２カ月ほどしてようやくA子は「気持ちがザワザワして落ちつかない。居場所の部屋でじっとしていられない。自分から，どうしても声がでない。『ありがとう』とか『ごめんなさい』とか，うまく言えない」と，自分の気持ちを教えてくれた。そこで，＜「居場所」に来たときには，『おはよう』って，A子さんから声をかけてみようか。15分だけは「居場所」でも算数の計算問題でもしてみようか＞と提案する。一方，「教室はだめ，お泊りは好き」というA子に，学校行事の宿泊自然活動参加に向けて，担任と保護者と連携し給食と総合学習にのみ参加を提案する。

３）第２期：X年10月～X＋１年 ３月

母親への支援とA子の生活習慣確立をサポート

「居場所」スタッフは，A子から挨拶の言葉がでるまで「待つ」という方針を皆で共有して実践し，家庭での挨拶も日常生活の中で，意識して実践してもらうように母親にお願いした。

A子の表情や雰囲気が少し明るくなり，自然活動の学校行事に参加できたことから，母親は「登校できるのではないか」との焦りと期待が膨らむ。「学校は行きたいけど，行きたくない気持ち」というA子に，母親は「家で自由にしていると自分の身の回りのことは何もしない。思い切って山村留学でもしたら自立につながるのではないか」と考える。

筆者は母親面接の機会に＜A子さんに適した進路を一緒に探して行きましょう。時間はまだまだありますから，母娘でいろいろなところを一緒に見学してみてはいかがでしょうか。その過程で，A子さんの『できること』を増やしていきましょう＞と，母親へのアドバイスを続ける。そして，筆者の紹介した公立の宿泊型サポート校に週に１回親子で通いはじめる。

４）第３期：X＋１年４月～X＋１年９月（A子６年生）教育関係機関との連携と進路相談

公立サポート校でA子は個別指導から始め，『音楽』の時間では集団授業に参加を始める。在籍校の修学旅行にも参加し，母親は「これならば，中学生から寮生活もできるかも」と期待するが，母親はA子の中学進路について，寮生活か私学か公立かに迷い始める。筆者がA子の気持ちを尋ねると，「知ってる人がいる地元の中学校に行きたい」と伝える。＜A子さんの希望が叶うように応援するよ。いずれにしても生活リズムを作ろう。45分は座っていられるようになれたらいいな＞と相談する。

A子のペースに添って，P市の適応指導教室の利用や，Q市の野外活動への参加，「居場所」の野外活動を工夫する。

5）第４期：X+１年９月～X+２年３月

A子の人間関係が広がり自信につながる

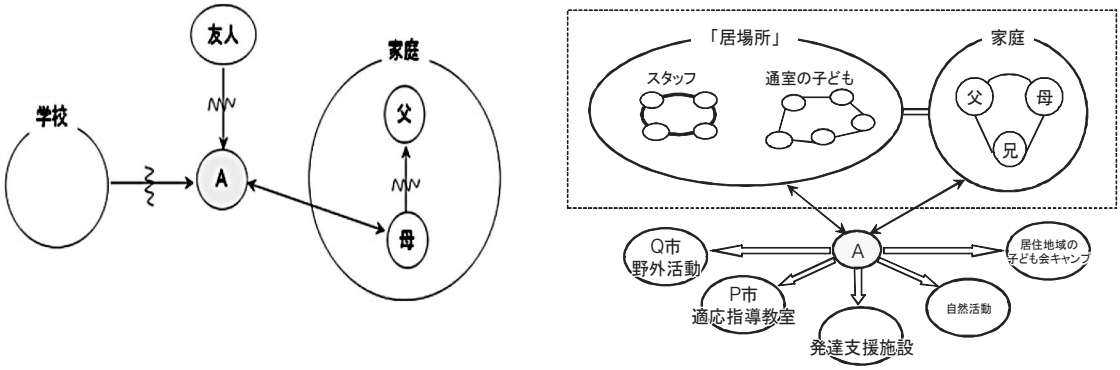
グループワークでも「トランプがやりたい」「私がイラストを描いてみる」とスタッフの支えの中で，自分の意見が言えるようになる。有名な歌手の歌がとても気に入り，そのことを卒業文集に「いつもは滅多に言葉を口にしない私だ。私は３年ぐらい小学校には通えなかった，しかし次はいよいよ中学生になる。落ち込んだり，へこんだりするときもあるかもしれない。だけど，“叶わぬ夢などないんだ”とこの曲を思い出す。今まで迷惑をかけてしまった周りの人に『いつもありがとう，これからもよろしくお願いします』と言いたい」と綴った。「居場所」での最後の会で，みんなの前でA子は消え入りそうな声であったが一人で歌った。その様子を両親が嬉しそうにビデオ撮影し，「今のままでA子を家から出すのは心配です，本人も地元中学を希望しているので，本人の希望通りでいいかな」と，進路を決める。

6）終結後：中学入学後から現在まで

中学入学前に，養護教諭と母親・A子が面談する。中学入学後は「居場所」を利用することなく下校後にたまに顔を出すことがあったが，普通登校を始める。A子は「みんなが助けてくれて，友達ができたので，学校に行けた」と話す。「自分のことを誰も知らない人の中で始めたい」と，A子は他県の私立高校に入学し遠距離通学し，高校推薦で希望大学に進学する。

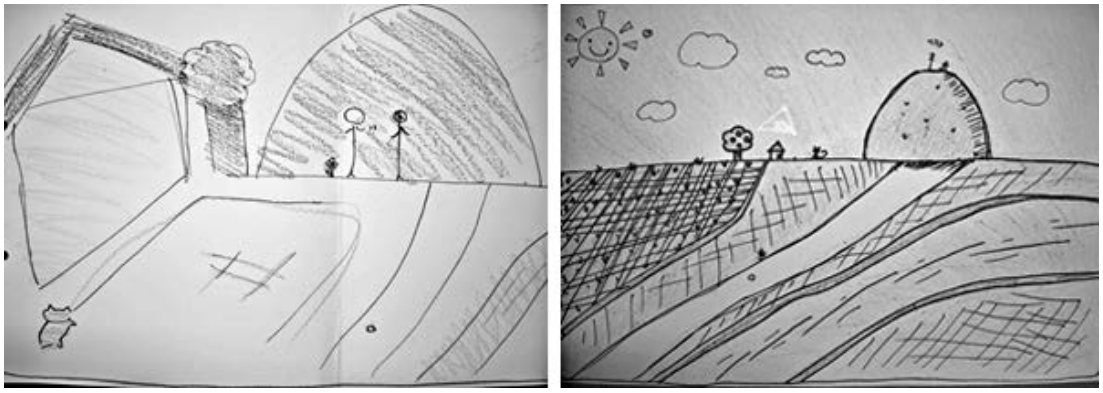
母親は，＜今，休むことはA子さんの将来にとって『あの時，休んで良かったな･･･』と，振り返れるようにしていきましょう。A子さんの将来に向けて準備時間はたくさんありますよ＞と言われても，最初は納得できなかった。しかし次第に「学校に行くだけが解決ではないし，焦らなくてもよいかな」と思えるようになった。

母親は「小学校でA子の『居場所』があってよかった。 小さい時からA子を見て『集団に入るのが嫌なのだろうな』と感じて将来が不安だった。地域との関わりや学校との関わりや『居場所』スタッフの方との関わりなど，みんなに支えてもらって本当にありがた



＜初回面接時のA子の人間関係＞　＜終結時点でのA子の人間関係＞

図１　A子を取り巻く人間関係の変化



６年生４月のA子描画　卒業前６年生３月のA子描画

図２　A子の描画変化

かった」と当時を振り返る。

Ⅲ　考　察

筆者がX年に関わった「居場所」を利用した小中学生の状況と経過を表１に表示する。公益財団の「居場所」を利用する子どもたちは，他者との関わり方が苦手で，ひきこもり傾向にある子どもたちが多い。一人ひとりの個別性はあるが，A子の事例についての報告と同様に，表１の子どもたちへの支援に共通して，以下の点が有用であると考える。

１．子どもの日常の生活体験を積み上げる支援

A子を含めX年の「居場所」利用者15名の中で，後片付けをはじめとした「生活の基本的習慣」が身についていない子どもが８人で53％であった。子どもや家庭の背景として様々な要因が予想されるが，「生活の基本的習慣」を育む日常生活体験の積み重ね，その中でのスタッフをはじめとした周囲の人たちとの「心地良い感情の共有」がA子の安心感につながったと思われる。

２．同年代のスモールグループ作りをとおして子どもの人間関係を広げる支援

A子は通室時点で家族以外の誰との交流もなかった。X年の「居場所」利用者15名のうち，友だちとの交流を持っていたのは一人だけであった。カードゲームや調理体験を取り入れたプログラムでも大学生ボランティアスタッフが声をかけないと会話が全くないという状況であった。

スタッフが，行動を教える，やって見せる，子どもの気持ちを言語化する，言語化を促す，そして子どもたちの間を「つなぐ」支援をとおして，人間関係の広がりが育っていた。スモールグループの人数としては，スタッフも参加して４～５人がまとまりやすかった。

３．教育関連機関のネットワークを活用した支援

A子の場合は，キャンプや里山づくり等の自然体験活動に興味を示したことから，「居場所」だけでなく地域の子ども会キャンプや適応指導教室の野外活動などを並行して活用した。筆者が母親に情報を伝え，連携機関との間をつなぐことで親子の行動範囲はひろがった。

「居場所」利用の他の子どもたちにもそれぞれの状況に応じて，積極的に連携機関の活用をすすめた。ネットワークを活用した支援は，サポート期間の短縮や進路決定やその実現に向けての連携サポートへとつながり，再登校をはじめるきっかけとなる。

４．保護者の子育て意欲や将来への希望につながる支援

A子の母親は，A子が小さい時から育てにくさを感じており，母親自身の子育て不安が大きかったが，相談することもなく一人で抱え込んでいた。「居場所」利用者の保護者とは，毎月個別相談を実施してきた。まず，保護者の労をねぎらい，次に「居場所」での子どもの良い変化を伝え，それを踏まえて家庭でできそうな具体的なことを相談し，そして保護者の具体的な心配事の解決を目指した。その過程で，A子の母親は次第にA子の気持ちを汲み取るようにその言動が変化してきた。それに伴うように，A子が将来への希望を抱くように変わってきたと思われる。

Ⅳ　おわりに

現在は不登校生支援の「居場所」も子どもや親の状況に応じて多様である。本実践報告では，筆者が関わった５年間の「小中学生の居場所」での支援をまとめた。

不登校児童・生徒への支援において共通することは，子どもたちが日常生活体験の積み重ねの中で，他者との感情を共有する楽しさを実感すること，自分の中から将来の希望を見出すことだと考える。

そのためには，子どもを取り巻くネットワークが連携して働きかけることが大切であり，今後は保護者への子育てへの意欲につながるような現実的なサポートネットワークがより重要になろう。

文　献

１）勝田麻津子，杉田郁代，金子恵美子，他：「児童・生徒の不登校克服のための支援連携基盤の強化推進事業」に関する調査研究，（公財）こども教育支援財団・文部科学省実践研究委託事業報告書，2006.

２）勝田麻津子，杉田郁代，金子恵美子，他：「不登校への対応におけるNPO等活用に関する実践研究事業」に関する調査研究報告書，（公財）こども教育支援財団・文部科学省実践研究委託事業報告書，2007.

表１　X年に「居場所」を利用した小中学生の状況と経過

NO	学年	性別	「居場所」利用までの状況とその後の経過	支援期間
1	中1	女	幼少時よりの対人緊張と集団が苦手で不登校を繰り返す。小４の２学期より完全不登校。中１から「居場所」に通室し、高校進学後は普通登校を始める。	２年１ヶ月
2	中3	男	小学４年時のいじめにより不登校。６年時に再登校を始めるが中１より継続的不登校。中１から「居場所」に通室し、高校進学後は普通登校を始める。	２年
3	中3	女	中１の３学期より身体症状を訴え不登校。家庭内が不安定で、安心できる「居場所」として週３日通室。高校進学後は普通登校を始める。	１年３ヶ月
4	中3	女	小６の２学期より不登校。朝起きられず病院で睡眠障害の診断をうける。同世代の女の子となじめない。高校進学後は普通登校を始める。	２年２ヶ月
5	小6	男	小５になって３日不登校になり自宅に引きこもる。母親との継続的な面談をとおして母親と一緒に「居場所」に来室、通室。中学校から次第に登校できる。	９ヶ月
6	中1	男	小１より保健室登校と不登校を繰り返す。兄２人も交互に継続的不登校。本児のみ「居場所」に通室し、適応指導教室との併用を経て、普通登校を始める。	１年４ヶ月
7	中3	女	中２の秋頃、運動が苦手で体育祭を休み、その後不登校。友人関係が作れない。安心できる「居場所」として通室し、高校進学後は普通登校を始める。	１年５ヶ月
8	中2	女	中１から不登校で適応教室に通室。中２の２学期より登校開始するもすぐに再不登校。「居場所」で同年代女子と仲良くなり、高校進学後は普通登校を始める。	１年３ヶ月
9	中2	男	中１の終わりから体調不良を訴え不登校、自宅にひきこもる。中２から「居場所」の大学生スタッフが家庭訪問し中３より通室開始。高校進学後は普通登校。	１年９ヶ月
10	中2	女	私立中学校で中１より別室登校、中２になり完全不登校に。安心できる「居場所」として通室し、高校は他校進学を選択し普通登校を始める。	９ヶ月
11	中2	女	中１の終わり頃から授業時間が落ちつかないと不登校に。外出できなかったが、母親と一緒に来室し遠方にもかかわらず電車で通室。高校進学後は普通登校。	９ヶ月
12	中3	男	中１の頃より身体的理由で入退院を繰り返し院内学級にも通級。中３時より完全不登校となり「居場所」通室。定時制高校に進学後、パン職人を目指す。	９ヶ月
13	中2	女	私立中学で中１から不登校。中２で登校を始めるが２学期から再不登校。本人の将来への不安感が強く「居場所」で勉強し他高校を受験し普通登校を始める。	４ヶ月
14	小5	女	小５より集団が苦手で不登校。母親と一緒であればテニス等の習い事など出かける。「居場所」に通室し、中学進学後は普通登校を始める。	１年２ヶ月

３）伊藤美奈子，金子恵美子，他：「不登校克服のための支援環境等強化推進事業」に関する調査研究報告書，（公財）こども教育支援財団・文部科学省実践研究委託事業報告書，2008.

４）勝田麻津子：幼児教育者に求められる発達支援能力についての検討－幼稚園における特別支援アドバイザーの実践から－，環太平洋大学研究紀要　第８号，32-40，2013.

５）勝田麻津子：子どもの関係性を育む支援に関する実践的研究－ひきこもり傾向の事例分析に基づく早期サポートの在り方についての考察－，環太平洋大学研究紀要　第９号，38-46，2014.

６）田中康雄：発達障害の早期発見・早期療育，そだちの科学 18，９-14，2012.

７）田嶌誠一：不登校の心理臨床の基本的視点，臨床心理学５巻１号，３-14，2005.

8）田嶌誠一：現実に介入しつつ心に関わる－「内面探求型アプローチ」「ネットワーク活用型アプローチ」「システム形成型アプローチ」，コミュニティ心理学研究　日本コミュニティ心理学会，12巻１号，１-22，2008.